

# 複合文化学通信

第3号（新年号）

（2007年1月5日発行）

早稲田大学 教育・総合科学学術院 教育学部  
複合文化学科「複合文化学通信」編集部

（編集責任 / 福田育弘）

みなさん **明**けましておめでとうございます。

まず、複合文化学科らしく、複合文化学科で学べるいろいろな言語で新年のあいさつをおとどけします。

ドイツ語

**Frohes Neues Jahr !**

〔フローエス・ノイエス・ヤール〕

フランス語

**Bonne année !**

〔ボンナネ〕

中国語

**新年好 !**

〔シンニエンハオ〕

ロシア語

**С Новым годом !**

〔ス・ノーヴイム・ゴードム〕

スペイン語

**¡ Feliz Año Nuevo !**

〔フェリス・アニョ・ヌエボ〕

朝鮮語

**새 해 복 많이 받으세요 .**

〔セ・ヘ・ボン・マーニ・パドゥセヨ〕

## 新年を祝う〈ことば〉もその〈過ごし方〉も多様なのが世界の文化のあり方

このように新年を祝うことばも多様ですが、その祝い方も多様です。

ドイツやフランス、ロシアやスペイン、さらには南米やアフリカの一部のようなキリスト教文化圏の国々では、お正月は1日だけが休みで、2日からもうすぐに仕事です。12月も31日まで働きます。12月28日に仕事納めをやって、三が日を「ゆっくり」「のんびり」ということはありません。

そのような家族でお正月をのんびり過ごすという習慣は、東南アジアの仏教文化圏の国によくみられる習慣です。

では、ヨーロッパでは、年末や新年に家族でゆっくり過すということはないのでしょうか。

あります。クリスマスです。

クリスマスは24日のイヴから25日の当日まで、家族が、たとえばおじいちゃんおばあちゃんの家に集まって、プレゼントを交換しながら、楽しくのんびり過ごします。また、24日の夜には、ミサにでかける人も少なくありません。

また、日本ではクリスマスというと、フレンチやイタリアンのレストランがおもに若いカップルで満員ですが、な

んとヨーロッパではクリスマスには、レストランもふくめて、ほとんどのお店はお休みです。「えー」という声が聞こえてきそうですが、日本の元旦や三が日を考えればわかりますよね。そう、まさに家族で「のんびり」「ゆっくり」過ごすのが、クリスマスなのです。

さらに、日本以外のアジアの国々でも、正月は1日だけが休みというところが少なくありません。

中国も韓国もそうです。多くのアジアの国々では、正月といえば旧暦（太陰暦）のお正月、2月にくる、いわゆる旧正月が重要で、この旧正月を家族で祝います。

さらに、ここにはことばを紹介しませんでした。イスラム文化圏の国々でも、正月は1日だけが休みで、もっとも重要なお祭りはイスラムの大祭です。ただし、イスラム系の国では、日常の暦に完全な太陰暦をもちいており、このお祭りは年によって、冬になったり夏になったりします！

こう考えると、新暦（太陽暦）で長くお正月を祝う日本は、世界レベルでは少数派だということに気づきます。

いやー、文化とはほんとうに多様で複雑なんですね。

# 「教室の外で楽しんでいることを、教室の中で学問にしておこう！」

後藤雄介〔ごとう ゆうすけ〕先生の研究テーマは「人種・民族の表象」です。

後藤先生からのメッセージです。

私の研究対象は本当はラテンアメリカなんですが、いつも遠くのことばかり考えているかというと、さにはあらず。日々の身近な出来事・事件を、学生とともに見つめています。

「肌の色」は本人にはどうにもできないもの、しかし人類は「肌の色」になにか本質的な「違い」があるかのようになし、自分と他者のあいだに「線引き」をしてきました。

残念ながらこうした「線引き」は、日常のさまざまな場面でいまだに実践されています。差別的な「線引き」に抗して、自分自身の手で境界線を「引き直す」こと——それが私からのメッセージです。

後藤ゼミ（学際コース「現代社会演習」）で学ぶ

N・O君（学際コース4年）の卒業論文のタイトルはまだ仮のものですが

「在日「新世代」——金城一紀論」というものです。

O君にとって、金城一紀の自伝的小説『GO』（直木賞受賞／のちに映画化）は、高校時代以来「バイブル」であった。「国境線なんか、俺が消してやるよ」という主人公のセリフに、O君はただただ「しびれて」いた。でもO君は、主人公＝金城一紀が消したかった「国境線」が、在日韓国朝鮮人と日本人とのあいだに幾重にも走っていることにやがて気づいていく。こうしてO君の、みずから境界線を「引き直す」作業は開始されたのであった。

福田 育弘 [ふくだ いくひろ] 先生の研究テーマは「**飲食の意味とその表象**」です。

福田先生からのメッセージです。

私の研究対象は「飲食」です。最近「飲食表象論です」といっています。というのも食べたり飲んだり、文化的な刷り込みや社会的なイメージが思いのほか重要で、頭で食べたり飲んだりするという部分が大きいからです。どこのケーキがおいしいとか、あそこのパスタはいける、とかいったことに、みなさんも左右されていませんか。また、多くの日本人が海外旅行で、ご飯とお漬け物を食べたくなるものと同じ理屈です。フランス人なら、おいしいパンとうまいチーズがほしくなります。でも、そうした食べたり飲んだりについては、日頃あまり真剣に考えません。考えないけれど、だれもがみな毎日〈実践〉しています！ そんな飲食のとても複雑で複合的な役割を、みなさんとともに多面的に考えてこうと思います。そうすると意外な領域にまで、考えが広がるのがみえてくるはずです。

福田ゼミ（学際コース「現代文化演習」）で学ぶ 六本木 潤 [ろっぽんぎ じゅん]（学際コース 4年）さんの卒業論文のテーマは「**酒場の時空間**」です。

お酒。それは遙か古代から、人間を魅了してやまない魔法の水です。テレビCMを見てみましょう。毎日1回は、お酒のCMを見erと思います。そのなかでは、みんながお酒を囲んで楽しく飲んでます（僕もそのなかの一人です）。では、なぜお酒は楽しいものなのでしょう。酔うから？ いや、それだけではないのです。お酒はもっと「深い」飲み物らしいのです。私はこの謎を解くために、酒場の時空間という問題を道具にして、卒業研究を書いています（もちろん、みなさんは20歳になるまでお酒を飲んではダメですよ）。

## 「こんな科目、こんな内容」

今回は「**複合文化学の開拓地**」のほかに、文化の複合性の考察とならんで、複合文化学科の3つの柱の他の2つである〈情報〉関連の科目と〈外国語〉関連の科目を紹介します。とくに外国語科目は、従来とはことなるコンセプトによる授業なので、期待してください。

### 「複合文化学の開拓地」

半期2単位のⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの4つの「開拓地」があります。

みなさんは、そのうち最低2科目を走破してください。

Ⅰ・Ⅱでは、「サイエンスへの広がり」を、

Ⅲ・Ⅳでは、「メディア・言語への広がり」をあつかいます。

この科目は、複合文化学の土台にある社会科学や自然科学のフィールドを理解し、狭い学問領域を越えて、より広い学際的なアプローチへの視野を開くことを目的とします。

「サイエンスへの広がり」では、生物、地球科学、経済、法律など、自然科学や社会科学から、地球という複合的なシステムについて複数の視点から考え、「メディア・言語への広がり」では、現代文化をメディア論的視点と言語学的手法からとらえ考察していきます。

メディアといっても、新聞・テレビなどのような「狭義のメディア」ばかりではなく、風景や日用品のように、なんらかのメッセージを発するものの総称を「広義のメディア」ととらえることによって、自然現象ばかりでなく文化現象も、深く関連しあったものとして考察することができます。

こうした視点にたって、地球環境や言語・メディア環境をめぐる最先端の学問と連動させ、具体的に複合的なテーマに関して各分野でのアクチュアルな問題にふれ、各専門分野固有の視点と方法論を学びます。

### 「アカデミックな世界に共通する基礎的な技法や作法」を「情報化された知」をあつかいながら学んでいこう！

高等教育機関である大学には、学術書、電子雑誌、データベースなど、いままでみなさんがたがアクセスすることが困難であった大量の「知」が蓄積されています。

そして、それらを有効に扱うためには、情報機器やネットワークの取りあつかいを習得するとともに、アカデミックな世界に共通する基礎的な技法や作法を身につける必要があります。

これを学ぶために1年次の必修科目として「**ツールとしての情報通信ネットワークⅠ・Ⅱ**」が設置されています。

この授業では研究者、ジャーナリスト、企業などで必要な最低限の情報発信技法についても学んでいきます。そのうえで、この分野に興味があれば、次の情報関連分野の専門選択科目を学んでいくことができます。社会科学側面から社会のネットワークの役割と意味を多面的にとらえる科目の「**ネットワーク論Ⅰ・Ⅱ**」、そこからさらにメディア史的をしばった「**メディアコミュニケーション論**」、情報社会の問題を技術抜きに語ることはできないので、それらを学ぶ「**ツールとしての情報通信ネットワークⅢ・Ⅳ**」などです。

そのうえでさらに「情報社会・情報倫理」で倫理面を深く追求することも可能です。

情報技術のメディア産業への影響やマルチメディア社会について考える科目として「**マルチメディア論Ⅰ・Ⅱ**」なども用意されています。

このように複合文化学科は **文理融合型の特色を生かしたカリキュラム構成** となっています。

## 英語以外の外国語を身につけ、社会や文化に対する窓をふやそう！

まず、1年次には教育学部共通の外国語科目として、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、スペイン語から一つを選び、90分授業で1年間週3コマ学習します。

(これらの外国語を既習の人は朝鮮語も選択できます。また、2種類以上の外国語を学習することもできます。)

複合文化学科では、これら学部共通の外国語科目に積みあげる形で、2年次以降に「ツールとしての外国語」「外国語演習」を設置しています。

### 「ツールとしての外国語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ」

(ドイツ語・フランス語・中国語・ロシア語・スペイン語)

学部共通の科目として1年次に学んだ外国語について、

「コミュニケーション」を中心にひきつづき学習していきます。

すべて半期2単位で、ローマ数字の順にしたがってグレードが上がっていきます。

Ⅰ・Ⅱは必修科目です。

「文化」を実際に体験するには、なによりその言語を知っていなければなりません。

どこかの国に行ったとき、その国の言葉を少しでも知っているだけで、その土地の人とのコミュニケーションの扉が開かれるのです。

「ツールとしての外国語」では、このようなコミュニケーションの道具としての外国語、つまり発信する力と受信する力をじょじょに伸ばしていく訓練を行います。

まずは外国語でサバイバルする能力、次は自分の考えを表現できる能力をやしなっていきます。

### 「外国語演習Ⅰ1・Ⅰ2・Ⅱ1・Ⅱ2・Ⅲ・Ⅳ」

(ドイツ語・フランス語・中国語・ロシア語・スペイン語)

学部共通の科目として1年次に学んだ外国語について、

「読むこと」を中心に引き続き学習していきます。

すべて半期2単位で、ローマ数字の順にしたがってグレードが上がっていきます。

6科目12単位が必修です。

2年次からスタートする外国語演習では、外国語で書かれたさまざまな文章を読んでいきます。

週1回半年の科目が、各言語についてそれぞれ6科目ずつ用意されています。

テーマは、言語そのものに焦点をあてる「言語を知る」、文学作品を読むことを通して社会や文化について学ぶ「文学テキストを読む」、その言語を使う地域の文化の多様性について考える「文化の諸相」の3つに分かれます。

いずれも、単に外国語の読解力をつけるだけでなく、その言葉を使っている地域の社会や文化を読み解く力をつけることも目的にしています。

教材には、インターネット上の文章や、現地の人々に“現在”読まれているナマの文章をできるだけ取りあげ、教室での学習が、自分自身での外国語による情報収集・利用につながるようにしています。

# 「アジア・ビューティー」をどう学ぶ？

「複合文化学通信」第2号では、複合文化学という新しい学問を説明するために、第1号で話題にした「アジア・ビューティー」を例にとって、このテーマを深めるには、複合文化学科のどんな科目を履修すればよいか、説明しました。

今回は、就職先について考えてみましょう。

みなさんが大学や学部や学科を決定する際には、そこで学ぶ内容が面白いかどうか、ということとならんで、そこで学んだことが就職に役に立つか、ということが判断基準になるはずです（もちろん、例の「偏差値」というモノサシもからんできますが、それは今は問わないでおきましょう）。

学費の負担者（おおむね、お父さまやお母さまですね）は、「アジア・ビューティーなんか勉強して、就職だいじょうぶなの？」、とたずねられるかもしれません。

そうですね。法学部や商学部と比べると、就職先が見えてきません。

とはいえ、複合文化学科はすでに実績のある学際コースを発展・継承して作られた学科ですから、学際コースの卒業生の就職先はひとつの目安になるはずです。

「アジア・ビューティー」というコンセプトに刺激を受けて作られたシャンプーが、花王のアジエンズでした。それに対抗するかたちで資生堂が売り出したのが、TSUBAKI です。

コンセプトのうえでは、アジアを単位にするか、日本を単位にするかという違いがあります。つまりシャンプーを購入する女性が、自分をアジアの女性として位置づけるか、日本の女性として位置づけるか、異なるわけです。

この比較はもうそれだけで研究対象になります。そして、日本人女性の美の基準がアジアにあるのか日本にあるのか（もちろん、「どちらがいい」とか、「どちらが正しい」とかいう問題ではありません）ということ考察する力は、〈就職力〉の一部になるはずです。

そういえば、学際コースの卒業生にも、資生堂や電通などに勤めている方がいます。

さらに、このような広い視野をもっていることは、当然のことながらマスコミ関係への就職の道も開いてくれるでしょう。学際コースの卒業生が、朝日新聞社、毎日新聞社、共同通信社、NHKなどに就職しているのが、その証拠です。

複合文化学科は「アジア・ビューティー」だけを学ぶ学科ではありません。あるいは、前号の研究紹介にあったようなクロスメディアによる知覚の変容だけを学ぶ学科ではありません。

「アジア・ビューティー」もクロスメディアによる知覚の変容も、コンテンツにすぎません。みなさんは特定のコンテンツに焦点を絞りつつ、同時に、**どんなコンテンツでもうまくデザインしプレゼンテーションできる技法を学ぶ**のです。

「アジア・ビューティー」で卒業論文を書くことができたならば、卒業論文を提出するまでにつちかったデザイン力とプレゼンテーション力で新たなコンテンツをあつかうことができるはずです。そして、これこそ実社会が求めている能力なのです。

第4号は2007年1月15日に発行予定です。